

の八幡へはてう屋の庄をきしんす。』と見え、木曾義仲記には、『よし申武連のひらく時こそと諸社へ神領をよせられける。中にも菅生の天神へは能美庄、佐那武社へは蝶屋庄。』とある。藩政時代に長屋庄がある。

**チヨウヤシヨウ 長屋庄** 石川郡に屬し、藩政時代では本吉・本吉新・手取・手取新・末正・長屋・西米光・東米光・蓮池・平加・鹿島・流安田の十二ヶ村が含まれた。

**チヨウヤスツラ 長泰連** 通稱九郎左衛門。藤連の子。足利義教に仕へ、嘉吉の變の後赤松滿祐の攻撃に従うた。

**チヨウユキツラ 長行連** 信連の三男。長氏系圖に鳳至郡大屋庄上野の地頭とある。

**チヨウヨウヨウ 重陽** 藩政時代では九月九日は重陽の佳節だから、物頭以上の諸士が登城拜賀した。服装は服紗小袖・麻上下である。民間に在つては何等の行事もないが、唯幼童の菊打と稱する遊戯をなすものがあつた許りである。今農村に十月九日萩餅を作り粟飯を炊ぐものあるはその遺風であらう。

**チヨウヨウヨウ 澄遙** 白山本宮の長吏。澄因の二子。その兄は小松梅林院を嗣いだ。澄遙弘化二年父の後を承けて長吏となり、未だ繪旨を受けずして明治維新に會し、二年六月復飾して三神民部といひ、後に名を直と改め、白山比咩神社の禰宜となつた。

**チヨウヨシツラ 長義連** 東鑑建長四年八月十四日將軍供奉人の中に長三郎左衛門尉朝連・長次郎左衛門義連があり、弘長三年八月九日の條に長雅樂左衛門三郎政連・長次右門尉義連がある。是を以て義連を信連の子で朝連の弟であらうとする説と、朝連の子で政連

の弟であらうとする説とある。信連の次子は長氏系圖に景信としてゐるから、それとは別のやうに思はれ、朝連の次子は系圖に掲げてない。又同書建長三年十二月廿六日の條に、長次郎左衛門尉久連があるのは、義連の前名の如くに見えるが、これは謀叛に加擔して誅戮又は配流せられた中に名を列するのであるから、必ずしもそれと斷じ難いやうである。

**チヨウヨシツラ 長好連** 加賀藩の老臣長氏第二代。連龍の嫡男で天正十年出生。初名熊松、後安藝守。その室は前田利家の女福姫であつた。慶長五年淺井駿に奮戦した際、利

長はその勇父九郎左衛門に勝ると稱して十左衛門の名を興へ、次いで十年十月朔日能登に於いて新知千石を賜はり、十一年家を襲いで連龍の三萬二千石に己の千石を加へ領したが、十六年九月十六日享年廿九を以て金澤に歿し、南涌院と諡し、鹿島郡田鶴濱悅叟寺に葬られた。好連子なく、父連龍再び家務を執つた。

**チヨウヨシツラ 長善連** 加賀藩の老臣長氏第六代。長高連の二子。享保十四年十一月二日出生。初名新十郎、後九郎左衛門。享保二十年六月廿五日高連の遺知三萬三千石(内二千石典力知)を襲ぎ、寶曆六年十二月七日廿八歳を以て卒。法號達德齋、金澤開禪寺に葬つた。

**チヨウヨリツラ 長頼連** 通稱次郎左衛門又は能登守。長氏系圖には九郎左衛門に作る。正連の子。文中三年(應安七)足利義滿兵を遣はして肥後の菊池武政を征せしめたが、この時頼連は畠山義深及び基國に屬して出征した。元中八年(明德二)山名氏清等、將軍義滿に

叛きて内野に戦つた時、頼連又畠山基國に從ひ、翌九年義深及び基國は、楠木正勝を千劍破城に攻めたが、頼連は之と共に兵を河内に出した。後應永六年大内義弘の叛した時、將軍義滿は基國・滿家、父子をして之を征せしめ、頼連はその軍に加つて和泉に入つた。

**チヨウラクジ 長樂寺** 金澤百姓町に在つて、當山派の山伏であつたが、明治元年神佛混淆廢止の後、復飾して神職となり、加藤主馬と稱した。

**チヨウラクジ 長樂寺** 河北郡森にあつて、眞宗東派に屬する。

**チヨウラクジ 長樂寺** 河北郡俱利伽羅の手向神社の別當であつた。眞言宗に屬し、山號は俱利伽羅山。三州紀聞に『長樂寺、百一石五斗八升五合、外五石七斗山手米。俱利伽羅村。眞言。不動尊也。寺の向、村家の後に古池あり。是より不動尊出現といふ。』とある。↓タムケンジンジャ 手向神社。

**チヨウラクジ 長樂寺** 鹿島郡七尾に在つて、眞宗西派に屬する。

**チヨウラクジ 長樂寺** 鹿島郡能登部下に在つて、眞言宗に屬する。山號は鷹王山。能登名跡志に『長樂寺とて密宗の大寺あり。當國順禮十九番の札所也。』と記する。順禮とは能登國三十三所觀音に對するものである。

**チヨウラクジ 長樂寺** 能登名跡志に載せる當國三十三番觀音札所中、第二十九番に長樂寺の觀音がある。この長樂寺は、鳳至郡和田小字谷内和田にある今の伊須流岐神社の地に在つたものといはれる。

**チヨウラクジ 長樂寺** 鳳至郡堀に在つて、眞宗東派に屬する。初め河北郡杉瀬に創立し、

慶長十一年輪島に移り、大正三年更に今の地に轉じた。

**チヨウラクジ 長樂寺** 鳳至郡宇出津に在つて、眞言宗に屬する。山號は白鷹山。寺記に、その初を知らぬが、天正元年宥舜を中興とする。當寺藏に絹本着色不動明王畫像三幅一舖のものがあつて、室町初期の作と認められる。

**チヨウラクジエンギ 長樂寺緣起** 一卷。貞享四年釋義剛の撰じたもので、俱利伽羅長樂寺の緣起である。

**チヨウリ 長吏** 長吏は寺務を總理する僧職の稱である。白山本宮では、白山記に『長吏藤氏末流、院主順次功勞也』とあるが、この文意は、初期には藤原氏の末流之に當り、後には院主功勞によつて順次之に陞るになつたと解せられる。尊卑分脈に、藤原利仁朝臣八代の孫富樫介家國の子富樫介信家が白山惣長吏となり、富樫氏の庶流倉光小六郎成資の子家成が白山本宮長吏となつたと記される類は、何れも藤氏末流である。次に坊官は長吏・院主・大勸進・大先達等の順序であるから、院主から長吏に進むことになつたのであらう。昔は金鑊宮・岩本宮・三宮・中宮・佐羅宮・別宮にも各長吏があつて、本宮の長吏が七社の惣長吏にも任ぜられたのである。白山宮莊嚴講中記録に、嘉祿二年十二月二日法限成舜本宮分の長吏職に補せられ、三年十月十六日白山長吏法限成舜が七社の惣長吏職に補せられたといふもの、即ち是である。室町時代以後各社衰微して長吏がなくなつてからは、本宮の長吏のみになり、院主陞任の例も止み、白光院が世襲して賀州白山禪頂同權現七社惣